

# 平成30年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

## 「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

**1 調査日** 平成30年4月19日（木）

**2 調査対象** 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

### **3 調査内容**

#### (1)教科に関する調査

○調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～6学年> 国語、社会、算数、理科

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

**学校名 品川区立伊藤学園**

## 【国語】

### (1) 定着状況の概要

#### 《昨年度》

- 2年** 「基礎」は、目標値の81.8に対し、正答率は88.3。「活用」は、目標値の65.0に対し、正答率は72.5であった。「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。
- 3年** 「基礎」は、目標値の77.0に対し、正答率は78.4。「活用」は、目標値の57.0に対し、正答率は61.1であった。「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回った。問題の内容では、「作文」と「ことばの学習」に課題が見られた。
- 4年** 「基礎」は、目標値の70.0に対し、正答率は75.6。「活用」は、目標値の55.0に対し、正答率は61.8であった。「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回る結果となった。
- 5年** 「基礎」は、目標値の71.7に対し、正答率は85.8。「活用」は、目標値の58.0に対し、正答率は76.5であった。「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を大きく上回っており、特に活用の力が身に付いている児童が多いことが分かる。

#### 《今年度》

- 2年** 「基礎」は、目標値の81.8に対し、正答率は86.1。「活用」は、目標値の62.5に対し、正答率は62.1であった。「基礎」の正答率は目標値を上回っており、「活用」の正答率は目標値を僅かに下回っている。
- 3年** 「基礎」は、目標値の78.0に対し、正答率は83.8。「活用」は、目標値の58.0に対し、正答率は59.6であった。「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回りおおむね良好な状況である。
- 4年** 「基礎」は、目標値の69.5に対し、正答率は75.6。「活用」は、目標値の64.0に対し、正答率は66.8であった。「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回った。問題の内容では、「調べたことを発表する」に課題が見られた。
- 5年** 「基礎」は、目標値の72.6に対し、正答率は80.1。「活用」は、目標値の52.0に対し、正答率は59.5であった。「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回った。特に、読み取る力や聞き取る力が身に付いていることが分かる。
- 6年** 「基礎」は、目標値の71.1に対し、正答率は80.0。「活用」は、目標値の50.0に対し、正答率は59.7であった。「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を大きく上回っており、学習内容が定着している児童が多いことが分かる。

今年度、2年の「活用」で正答率が目標値に僅かに届かなかった以外は、どの学年も昨年度から引き続き「基礎」「活用」共に目標値を大きく上回り、高い定着率を維持できている。

### (2) 具体的な課題とその原因

- 2年** 「文章を書く」の問題のみ、目標値83.3に対して正答率82.8と僅かに下回っている。記述式の問題に抵抗感があることが原因と考えられる。
- 3年** どの問題の内容も目標値を上回ったものの、「さいきんのできごとをはっぴょうする」が目標値の35.0に対し、正答率は32.2と下回った。このことから「書くこと」に課題があると考えられる。箇条書きのものを文章の形にすることに慣れていないことが原因と考えられる。
- 4年** 「調べたことを発表する」の問題のみ、目標値の55.0に対し、正答率は51.8と下回った。このことから「話すこと・聞くこと」に課題があることが分かり、日常の会話の中で、自分の言いたいことを相手に分かりやすく伝えようとする意識が低いことが原因だと考えられる。
- 5年** 全ての内容で目標値を上回っているが、「漢字を書く」の目標値が65.0に対し、正答率は67.0であることから、「漢字を書く」にやや課題があると考えられる。漢字を読むことはできるが、熟語の意味の理解度が低く、十分定着していないことが原因だと考えられる。
- 6年** 「漢字を書く」の問題で目標値55.0に対し、正答率は59.3であった。ある程度は漢字を書くことはできるが、定着に少し課題があることが分かる。また、「話し合いの内容を聞き取る」の問題では、目標値71.7に対し、正答率は76.2であった。聞き取った情報から必要な情報を取り出して理解することに課題が見られる。原因として、話し手の一番伝えたいことを意識して聞いていないことが考えられる。

### (3) 課題解決のための方策（取組指標）

- 2年は、引き続き週末に日記の宿題を課すことや、国語だけでなく、自分の意見や考えを記述させる活動を増やしたり、書くときのポイントを丁寧に示したりしていく。
- 3年は、他教科でも自分の考えをまとめ、ノートに書く活動を行っている。今後は、特に国語科において必要な情報から自分の考えを整理して文章の組み立てに気を付けて書く活動の場を増やしていく。
- 4年は、調べたことから伝えるべき事柄を適切に挙げて説明したり、調べたことを伝えるために効果的な方法をとったりすることに課題があるため、国語の学習だけでなく、社会等で調べ学習をした際には、調べ方だけでなく、発表の仕方も学べるよう、発表する場を積極的に増やしていく。
- 5年は、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の学習内容について定着を図るために、宿題の漢字練習の徹底と漢字練習の際に漢字の意味を辞書から調べさせる。また、生活ノートを書く際にできるだけ多くの漢字を書かせるなど、習慣的な漢字の活用を身に付けさせる。
- 6年は、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の学習内容について定着を図るために、授業において、漢字の指導を丁寧に行っていく。また、話し手が何を言いたいのかを理解できるように話し合い活動を多く取り入れていく。

### (4) 次年度の数値目標（成果指標）

- 2年は、「文章を書く」のみ目標値を下回っているため、次年度は上回るように指導していく。
- 3年は、全国平均とほぼ同程度で、おおむね良好な状況である。「書くこと」の領域で目標値を上回るように指導していく。
- 4年は、「調べたことを発表する」のみ、目標値を下回ってしまったため、次年度は「調べたことを発表する」の正答率が目標値を上回るよう指導していく。
- 5年は、全ての内容で目標値を上回っていた。その中で、「漢字を書く」では目標値と同程度であったため、目標値を5ポイント以上上回ることを目指し漢字の活用を習慣化するよう指導していく。
- 6年は、全ての領域で目標値を上回っていた。しかし、「漢字を書く」領域や「話し合いの内容を聞き取る」の領域では、目標値と同程度の正答率であるため、10ポイント以上上回るように指導していく。

## 【 国 語 】

### (1) 国語の定着状況の概要

#### 《昨年度》

**7年** 「基礎」の目標値 70.0 に対し、正答率は 76.7、「活用」の目標値 62.1 に対し、正答率は 74.5 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。

**8年** 「基礎」の目標値 70.6 に対し、正答率は 75.9、「活用」の目標値 55.0 に対し、正答率は 59.3 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。

#### 《今年度》

**7年** 「基礎」の目標値 65.2 に対し、正答率は 66.9、「活用」の目標値 50.7 に対し、正答率は 57.1 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。

**8年** 「基礎」の目標値 66.5 に対し、正答率は 67.2、「活用」の目標値 52.9 に対し、正答率は 62.3 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。

**9年** 「基礎」の目標値 64.4 に対し、正答率は 67.4、「活用」の目標値 56.4 に対し、正答率は 69.1 であった。「基礎」は目標値を上回っていることから定着できており、「活用」も同様である。

今年度、どの学年も昨年度から引き続き「基礎」「活用」共に目標値を大きく上回り、高い定着率を維持できている。

### (2) 具体的な課題とその原因

**7年** 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する領域で、「漢字を読む」問題では目標値を上回っているが、「漢字を書く」問題では下回っていた。これは、漢字の書き取りの学習が求められる定着度に対して不足していたと考えられる。また、「書くこと」に関する領域における「作文」の問題で、「指定された文字数・段落の構成にのっとって書くこと」と、「自分のとる立場や考えを明確に書くこと」が目標値を下回っていた。これは、作文の構成に注意し、目的意識をもって書くことがあまり定着していなかったからだと考えられる。

**8年** 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する領域で、特に「文法・語句に関する知識」の問題では単語の問題で正答率が目標値 65.0 に対して 32.7 で、文節をどのように単語に分けるかを理解していないと思われる。また、同じ領域の問題で、古典の文章の問題における現代語訳の問題で目標値 85.0 に対し正答率 77.9、歴史的仮名遣いの問題で目標値 70.0 に対し正答率 52.9 で、古文と現代語訳を対照させて読めておらず、基本的な歴史的仮名遣いの直し方を理解していないと思われる。

**9年** 全ての領域で目標値を上回ったが、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する領域で特に漢字を書く問題では正答率が目標値 57.5 に対して 57.2 であった。問いによっては目標値に対して約 10 上回るものや 15 下回るものもあり、幅広く漢字を身に付ける必要がある。また、「読むこと」の領域で特に文学作品の内容の読み取りで、場面の展開や表現の仕方をとらえる問題については目標値 30.0 に対して 20.3 であり、場面と語り手に注目して読む力が定着していないと考えられる。

### (3) 課題解決のための方策（取組指標）

7年は、まず「漢字」の学習において「書き取り」を重視した学習を行う。そのために毎時間漢字の学習を行い、様々な活動で漢字の反復学習を取り入れていく。次に、「作文」の学習においては、「読む」力を生かした「書く」力の育成を図っていく。説明的文章の単元で「読む」学習で文章の構成について学んだことを生かしつつ、様々な文章を「書く目的」とそれを「読む相手」をより意識して文章を書く学習を行うことで、書く力を定着させていきたい。

8年は、文法・語句に関して、復習用プリントを家庭学習や長期休業時等の補助教材として活用し学力向上を図る。また、古典の現代語訳に関して、ICT 機器を活用し古文と現代語訳を対照させて読む方法を指導する。歴史的仮名遣いの直し方は、古語から段階を踏んで古文を繰り返し音読して反復練習を行い、歴史的仮名遣いを直す力を身に付けさせる。

9年は、漢字の書きを中心に幅広く数多くの語を取り上げて確認テストに取り組むとともに、復習用プリント等を活用し、家庭学習の補助教材にして継続的に語彙力の強化を図る。また、読むことの領域で本文の叙述を基にして場面の展開や表現の仕方について読み取る活動を行っていく。

### (4) 次年度の数値目標（成果指標）

7年は、漢字を書く問題や作文の問題で目標値が改善し、全ての領域で目標値を上回ることを目指す。

8年は、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「文法・語句に関する知識」の問題について目標値を上回る正答率を目指す。また、その他の領域に関しても、目標値を上回る正答率を目指す。

## 【 社 会 】

### (1) 定着状況の概要

#### 《昨年度》

**4年** 「基礎」は、目標値の76.1に対し、正答率は79.3。「活用」は、目標値の53.3に対し、正答率は53.1であった。「基礎」は上回ったものの、「活用」は、正答率は目標値を僅かに下回った。

**5年** 「基礎」は、目標値の73.0に対し、正答率は77.7。「活用」は、目標値の54.0に対し、正答率は59.5であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

#### 《今年度》

**4年** 「基礎」は、目標値の71.1に対し、正答率は73.2。「活用」は、目標値の46.7に対し、正答率は48.8であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

**5年** 「基礎」は、目標値の64.3に対し、正答率は67.6。「活用」は、目標値の51.0に対し、正答率は55.9であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

**6年** 「基礎」は、目標値の67.4に対し、正答率は68.4。「活用」は、目標値の52.9に対し、正答率は62.1であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

昨年度の4年の「活用」で目標値に届かなかったが、今年度は目標値を上回り、能力の向上が見られた。その他の学年では、目標値以上の正答率を維持できており、定着状況は良好である。

### (2) 具体的な課題とその原因

**4年** 「店ではたらく人」の問題において、「地域の人々の販売の仕事に見られる工夫について考える」問題では、目標値65.0に対し、正答率が85.5と高い数値を示していた。しかし、「買い物調べ」の「買い物で安い品物を選ぶうえでの留意点について考える」問題では、目標値が75.0であるのに対し、正答率が49.3となっており、目標値を下回る結果であった。

実際に見学して販売者側の立場で物事を考えたことについては理解できているが、消費者としての目線で紙面上のことから読み取って考えることに慣れていなかったことが原因と思われる。

**5年** 「ごみの処理と利用」の問題において、「廃棄物の処理の仕方について資料を読み取る」問題では、目標値85.0に対し、正答率が94.7と高い数値を示していた。しかし、「廃棄物の処理を計画的に行っていることについて、資料を読み取り考えて、表現する」問題では、目標値が30.0であるのに対し、正答率が24.2となっており、目標値を下回る結果であった。

資料を読み取ることはできるが、そこから事象との因果関係を考察することに慣れておらず、さらにどのように説明を書けばよいかを理解しきれていないことが原因と思われる。

**6年** 「工業生産と貿易」の問題において、「加工貿易についての理解」が問われる問題では、目標値55.0に対し、正答率が60.7と高い数値を示していた。しかし、「貿易や運輸が工業生産を支えていることについて、複数の資料を読み取り考えて、表現する」問題では、目標値が45.0であるのに対し、正答率が37.7となっており、目標値を下回る結果であった。

学習内容の理解や資料の読み取りはできるが、複数の資料から関連して言えることを考えたり、起こっている事象と資料に示された内容との因果関係を考察したりすることに慣れておらず、さらにどのように説明を書けばよいかを理解しきれていないことが原因と思われる。

### (3) 課題解決のための方策（取組指標）

- ・4年は、様々な立場になって物事を考える習慣をつける必要がある。そのために、ICT機器を活用して社会的事象を取り上げる中でシミュレーションを行ったり、インタビューの様子を映像で見たりするなど、その立場の人の思いを理解できるようにする。
- ・5年と6年共に、資料を見る「観点」や、「どんなことが読み取れるか」を指導していく必要がある。そのために、ICT機器を活用して地図と実際の写真とを対比させたり、ノートに読み取ったことを書かせて意見を交換させたりなど、考察する力を高められるようにする。

### (4) 次年度の数値目標（成果指標）

- ・4年では、それぞれの仕事の内容や働く人の思いに関する問題で、推論や考察をできるようにし、目標値を上回ること。
- ・5年と6年共に、地図や地形資料の読み取りに関する問題で、推論や考察をできるようにし、目標値を上回ること。

## 【 社 会 】

### (1) 定着状況の概要

#### 《昨年度》

**7年** 「基礎」の目標値 62.1 に対して、正答率 59.4、「活用」の目標値 47.0 に対して正答率 51.3 と、「活用」は目標値を上回っているが、「基礎」は目標値を下回っており、基礎的な学習内容の定着を図る必要がある。

**8年** 「基礎」の目標値 56.1 に対して、正答率 51.8、「活用」の目標値 43.3 に対して正答率 41.6 と、「基礎」「活用」ともに、目標値を下回っており、特に基礎的な学習内容の定着を図る必要がある。

#### 《今年度》

**7年** 「基礎」の目標値 60.0 に対して正答率 58.0、「活用」の目標値 50.0 に対して正答率 57.8 と、「活用」は目標値を大きく上回っていたが、「基礎」は目標値を下回っていた。

**8年** 「基礎」の目標値 53.3 に対して正答率 46.6、「活用」の目標値 43.0 に対して正答率 47.3 と、「活用」は目標値を上回っていたが、「基礎」は目標値を大きく下回っていた。

**9年** 「基礎」の目標値 57.5 に対して正答率 50.6、「活用」の目標値 47.0 に対して正答率 56.4 と、「活用」は目標値を大きく上回っていたが、「基礎」は目標値を大きく下回っていた。

昨年度の8年では「基礎」「活用」共に目標値に届かなかったが、今年度は「活用」で目標値を上回り、能力の向上が見られた。また、昨年度の7年の「基礎」が目標値に届かなかったが、残念ながら今年度も定着状況に変化がなかった。

### (2) 具体的な課題とその原因

**7年** 観点別正答率では、「社会的な思考・判断・表現」は目標値を上回っていたが、「資料活用の技能」は目標値 52.2 に対して正答率 50.1 と下回っていた。基礎的な学習内容の定着を図るとともに、「資料活用の技能」を定着させていくことが課題である。原因としては、思考や表現を行う際に、自らの知識に頼り、資料などを根拠としようとしていないため、資料活用の必要性を感じていないことが考えられる。

**8年** 観点別正答率では、どの観点においても下回っているが、特に「社会的事象についての知識・理解」は目標値 54.0 に対して正答率 46.7 と大きく下回っていた。思考・判断・表現を行う際の基盤となる基礎的な知識・理解の定着は喫緊の課題である。原因としては、授業内での反復学習の不足や、日常的な家庭学習の未定着が考えられる。

**9年** 観点別正答率では、「社会的事象についての知識・理解」が、目標値 57.6 に対して正答率 51.5 と大きく下回っていた。基礎的な学習内容の定着を図ることが課題である。原因としては、授業内での反復学習が不足していることや日常的な家庭学習が不十分なため、既習事項の定着が十分図られていないと考えられる。

### (3) 課題解決のための方策（取組指標）

7～9年で共通して、授業における課題解決の際に、資料の活用を必要とするような課題を工夫するとともに、資料を活用する場面を多々設けていく。また、基礎的な知識・理解の定着のために、授業内で既習内容を確認する時間を更に増やしていく。

### (4) 次年度の数値目標（成果指標）

7年では、「資料活用の技能」の正答率を目標値よりも上回るようにする。

8年では、「社会的事象についての知識・理解」の正答率を目標値よりも上回るようにする。

## 【算数】

### (1) 定着状況の概要

#### 《昨年度》

- 2年** 「基礎」は、目標値の85.6に対し、正答率は92.4。「活用」は、目標値の58.6に対し、正答率は60.9であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。
- 3年** 「基礎」は、目標値の72.2に対し、正答率は76.5。「活用」は、目標値の72.2に対し、正答率は50.8であった。「基礎」の正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。
- 4年** 「基礎」は、目標値の76.7に対し、正答率は82.1。「活用」は、目標値の59.3に対し、正答率は69.0であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。問題の内容では、「長さ・重さ」が、目標値の73.3に対し、68.4と下回った。
- 5年** 「基礎」は、目標値の72.9に対し、正答率は82.0。「活用」は、目標値の53.3に対し、正答率は62.2であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

#### 《今年度》

- 2年** 「基礎」は、目標値の83.6に対し、正答率は86.7。「活用」は、目標値の65.6に対し、正答率は61.7であった。「基礎」の正答率は目標値を上回っており、「活用」の正答率は目標値を下回っている。
- 3年** 「基礎」は、目標値の77.7に対し、正答率は83.2。「活用」は、目標値の55.8に対し、正答率は57.2であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回った。全国平均とほぼ同程度で、おおむね良好な状況である。
- 4年** 「基礎」は、目標値の77.8に対し、正答率は81.1。「活用」は、目標値の62.9に対し、正答率は64.0であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回った。全国平均とほぼ同程度で、おおむね良好な状況である。問題の内容別にみると、「かけ算」の目標値が70.0に対し、正答率が64.3と下回った。
- 5年** 「基礎」は、目標値の70.5に対し、正答率は73.7。「活用」は、目標値の56.3に対し、正答率は60.1であった。「基礎」「活用」共に、正答率は目標値を上回る結果となった。しかし、問題の内容別正答率をみると、「面積」と「計算のきまり・変わり方調べ」の正答率が目標値を下回っていた。
- 6年** 「基礎」は、目標値の70.9に対し、正答率は77.7。「活用」は、目標値の49.3に対し、正答率は57.3であった。「基礎」、「活用」共に、正答率は目標値を上回っており、定着できている様子である。

昨年度の3年の「活用」で目標値に届かなかったが、今年度は目標値を上回り、能力の向上が見られた。その他の学年では目標値以上の正答率を維持しており、定着状況は良好である。

### (2) 具体的な課題とその原因

- 2年** 「かたち」の目標値が66.3に対し、正答率は59.7と下回った。複合図形を、もともになる図形に分解して考える力に課題があると考える。もともになる図形を使って複合図形を作る力や、もともになる図形に分解する力の定着が不十分であったことが原因と考えられる。
- 3年** 「10000までの数・分数」が目標値76.0に対し、正答率は74.4と下回った。数の大小、順序や系列、100などを単位とした相対的な大きさの理解に課題がある。原因としては、「10000より大きい数」の学習で問題の反復練習が不足していることが考えられる。
- 4年** 「かけ算」の目標値70.0に対し、正答率が64.3と下回った。2桁×1桁、2桁×1桁の筆算で必要とされる、計算の技能であるかけ算の九九やたし算の操作に課題がある。原因としては、計算の反復練習が不足していて、かけ算の筆算に慣れていないことが考えられる。
- 5年** 「面積」の目標値46.7に対し、正答率が38.2と下回り、公式の活用に課題がある。原因としては、面積に関わる問題演習が不十分で、公式の活用方法が十分身に付いていないことが考えられる。
- 6年** どの領域も正答率が高く、目標値を上回っていた。「小数の計算」と「分須の計算」に関しては、いずれも目標値+5に達しておらず、他の内容と比較すると、課題と言える。分析結果から、「分数と小数の大小比較をする力」、「整数÷小数の商と余りを正しく求める力」が十分身に付いていないことが原因だと考えられる。

### (3) 課題解決のための方策（取組指標）

- 2年では、立体や平面図形の具体的な操作を通して、図形の概念形成がなされる指導の工夫に努める。
- 3年では、計算などの反復練習を継続するとともに、復習内容も取り入れながら、既習内容を活用できるような指導の工夫に努める。
- 4年では、かけ算の計算や文章問題の復習を授業や家庭学習に取り入れるなど、指導の工夫に努める。
- 5年では、立体や平面図形の底辺や高さの測定など具体的な操作を通して、面積や体積を算出するために必要な値を図から読み取れる力を身に付けられるよう、指導の工夫に努める。
- 6年では、計算する力を反復練習で身に付けさせるのではなく、計算の意味や計算のしかたを既習事項をもとに考え、図や式、言葉などを用いてそれを表現できるようにすることを重視し、指導の工夫に努める。

### (4) 次年度の数値目標（成果指標）

- 2年は、図形領域と、「活用」の目標値を上回ることを目指す。
- 3年は、全ての領域・問題内容で目標値を上回ることを目指す。
- 4年は、かけ算に関わる問題の内容で目標値を上回ることを目指す。
- 5年は、全ての領域・問題内容で目標値を上回ることを目指す。
- 6年は、全ての領域・問題内容で目標値+5.0を上回る正答率を目指す。

## 【 数 学 】

### (1) 数学の定着状況の概要

#### 《昨年度》

**7年** 「基礎」についての目標値が 68.2 に対し、正答率は 73.1、「活用」についての目標値が 58.6 に対し、正答率が 61.7 と目標値を上回り、概ね良好であると判断できる。

**8年** 「基礎」についての目標値が 59.7 に対し、正答率は 59.2、「活用」についての目標値が 50.0 に対し、正答率が 48.1 と、どちらも下回っており、学習の見直しを行う必要があると判断できる。

#### 《今年度》

**7年** 「基礎」についての目標値が 74.5 に対し、正答率は 75.0、「活用」についての目標値が 64.3 に対し、正答率が 67.3 と「基礎」と「活用」共に目標値を上回り、概ね良好であると判断できる。

**8年** 「基礎」についての目標値が 60.5 に対し、正答率は 66.5、「活用」についての目標値が 46.7 に対し、正答率が 55.7 と、概ね良好であると判断できる。特に、「活用」については目標値を 10 近く上回っており、内容が十分に定着できていると判断できる。

**9年** 「基礎」についての目標値が 62.4 に対し、正答率は 65.1 とおおむね良好であると判断できる。また、「活用」についての目標値は 38.1 に対し、正答率が 36.3 となっていて、学習の見直しを行う必要があると判断できる。

昨年度の 8 年では「基礎」「活用」共に目標値に届かなかったが、今年度は「基礎」で目標値を上回り、能力の向上が見られた。その他の学年では目標値以上の正答率を維持しており、定着状況は良好である。

### (2) 具体的な課題とその原因

**7年** 「数と計算」の小数の計算と、「図形」の合同な図形についての理解が全国平均を下回っている。特に、小数の活用問題では全国平均を 10 近く下回っており、小数や分数の計算の練習が不足していると考えられる。

**8年** 各分野で目標値は上回っているものの、「関数」の「比例と反比例」のいくつかの問題では全国平均を下回っている。特に、グラフと値の変化の様子を把握する分野で課題が見られ、“関数のグラフの概形やグラフ上の点”と“授業で演習している計算処理”のそれぞれは理解できているが、それらのつながりや関係性が理解しきれていないと考えられる。

**9年** 「図形」と「資料の活用」の分野で、目標値を下回っている。特に、「図形の証明」や「確率」などの意義や利便性を理解し、活用する力に課題が見られる。中でも確率は 7 年生の 2、3 月に学習し、それ以降は扱わない。そのため、9 年生の時には、学習した内容を忘れてしまっていることが原因として考えられる。

### (3) 課題解決のための方策（取組指標）

7 年の基礎コースでは特に、前時の復習を入念に行い、定着状況の確認を行っていく。また、適宜、東京ベーシック・ドリルなど個々の定着状況の応じた単元別の課題を用い、計算技能を高められるような機会を設ける。

8 年では、各教室に設置されたプロジェクターを活用し、関数や図形などの分野で有効に活用していく。

9 年では、学期末や学年末などに、その期間の学習内容を総復習する時間を確保する。

7～9 年では、区学力定着度調査用の復習課題を授業で活用する。

### (4) 次年度の数値目標（成果指標）

7 年では、「基礎」「活用」共に、正答率が目標値を 5.0 以上上回れるよう指導していく。

8 年では、「基礎」「活用」共に、正答率が目標値を 5.0 以上上回れるよう指導していく。

## 【 理科 】

### (1) 定着状況の概要

#### 《昨年度》

**4年** 「基礎」の目標値 69.0 に対し正答率は、68.6、「活用」の目標値 49.2 に対し正答率は 46.9 であった。「基礎」・「活用」共に、目標値に達していないのが現状である。身近な自然の観察や植物、昆虫などは、正答率が目標値を上回っている。しかし、太陽や電気、磁石の性質など実際に目に見えない物や扱いが不慣れなものなどは、目標値に達していないと言える。

**5年** 「基礎」の目標値 67.8 に対し正答率は 73.9、「活用」の目標値 45.0 に対し正答率は 51.0 であった。「基礎」・「活用」共に、目標値を上回る結果となった。しかし、問題の内容別正答率をみると、「水のすがた」の分野が目標値より正答率が下回っていた。

#### 《今年度》

**4年** 「基礎」の目標値 73.3 に対し正答率は、76.6、「活用」の目標値 58.6 に対し正答率は 60.9 であった。「基礎」・「活用」とともに目標値を上回る結果となった。身近な自然と観察、植物の育ち方、風やゴムのはたらきなどの分野で目標値を上回っている。しかし、昆虫のからだのつくりや磁石の性質が目標値に達していなかった。

**5年** 「基礎」の目標値 73.4 に対し正答率は 78.5、「活用」の目標値 55.7 に対し正答率は 60.6 であった。「基礎」・「活用」とともに目標値を上回る結果となった。1年間の植物の成長、1年間の動物のようす、物の体積と力などの分野で目標値を上回っている。天気のようにすと気温などが目標値に達していなかった。

**6年** 「基礎」の目標値 70.0 に対し正答率は 67.7、「活用」の目標値 58.6 に対し正答率は 60.9 であった。「基礎」は目標値を下回ったものの、「活用」は目標値を上回る結果となった。魚の誕生、流れる水のはたらき、ふりこのきまりなどの分野で目標値を上回っている。しかし、植物の発芽と成長、顕微鏡の使い方などが目標値に達していなかった。

昨年度の4年では「基礎」「活用」共に目標値に届かなかったが、今年度は「基礎」「活用」共に目標値を上回り、能力の向上が見られた。昨年度の5年では「基礎」「活用」共に目標値を上回っていたが、残念ながら今年度は「基礎」の定着率の低下が見られた。

### (2) 具体的な課題とその原因

**4年** 「磁石の性質」分野に関して、特に評価が低い問題は、「実験結果をもとに、誰の予想が正しかったかを説明することができる」問題で目標値 30.0 に対し、正答率 23.2 であった。他の問題についても、目標値とほぼ同じ正答率という状況であった。磁石の性質を理解していないことが上記のことから分かる。学習の過程で「電気の通り道」と「磁石の性質」で知識が整理されていないのではないかと考えられる。

**5年** 「天気のようにすと気温」分野に関して、特に評価が低い問題は、「百葉箱について分かる」問題で目標値 65.0 に対し、正答率 58.9 であった。また、「空気中の水蒸気を取り出している方法を推測することができる」問題も目標値 30.0 に対し、正答率 18.9 であった。気象に関わる知識の理解とその活用に課題がある。原因として、天気についての理解と同時に水の状態変化との関連が整理できていないのではないかと考えられる。

**6年** 「植物の発芽と成長」分野に関して、特に評価が低い問題は、「適切な対照実験を行うことができる」問題で目標値 45.0 に対し、正答率 15.2 であった。また、「黄ならを育てる条件について推測することができる」問題も目標値 55.0 に対し、正答率 43.0 であった。植物の領域における実験方法の活用に課題がある。原因として、条件制御による実験についての知識が整理できていないのではないかと考えられる。

### (3) 課題解決のための方策（取組指標）

4年・5年・6年共に、区学力定着度調査用の復習課題を授業で活用する。また、定期的に復習の時間を設けることで知識の定着を図るようにする。

4年では、物質の共通する性質と固有の性質をきちんと整理して習得できるよう指導していく。

5年では、既習事項を身の回りの自然現象に関連付けて考えられるように指導していく。

6年では、課題解決のための実験方法を児童が主体的に計画するような機会を多く設けていく。

### (4) 次年度の数値目標（成果指標）

4年は、「太陽と地面の様子」や「電気の通り道」、「磁石の性質」などの分野では、デジタル教材等を活用し、知識として児童に定着させ、目標値の正答率を目指す。また、その他の領域に関しては、目標値を上回る正答率を目指す。

5年は、「天気のようにすと気温」の分野では、デジタル教材等を活用し、児童が学習内容を深く理解できるようにし、目標値の正答率を目指す。その他の分野については、目標値を上回る正答率を目指す。

6年は、「植物の発芽と成長」、「ふりこのきまり」、「けんび鏡の使い方」の分野では、デジタル教材等を活用し、児童が学習内容を深く理解できるようにし、目標値の正答率を目指す。その他の分野については、目標値を上回る正答率を目指す。



## 【理科】

### (1) 定着状況の概要

#### 《昨年度》

**7年** 「基礎」の目標値 61.0 に対し、正答率 58.4、「活用」の目標値 54.4 に対し、正答率 56.9 であった。「基礎」の学習内容が十分に定着していない。

**8年** 「基礎」の目標値 57.9 に対し正答率 56.9 で、「活用」の目標値 42.5 に対し正答率 31.8 であった。「基礎」は目標値に近いが、「活用」ができていない。

#### 《今年度》

**7年** 「基礎」の目標値 60.6 に対し、正答率 58.9、「活用」の目標値 54.4 に対し、正答率 50.3 であった。「基礎」の学習内容が十分に定着していないため、「活用」の値も達していないと考えられる。

**8年** 「基礎」の目標値 60.6 に対し、正答率 54.6、「活用」の目標値 42.0 に対し、正答率 38.5 であった。「基礎」「活用」共に目標値を下回り、学習内容が十分定着していない。

**9年** 「基礎」の目標値 57.3 に対し正答率 47.3 で、「活用」の目標値 48.3 に対し正答率 35.1 であった。「基礎」「活用」共に目標値を大きく下回り、学習内容が定着していない。

今年度も 8・9 年では、「基礎」「活用」共、残念ながら目標値に届かず、定着状況に変化が見られなかった。

### (2) 具体的な課題とその原因

**7年** 自然事象への関心・意欲・態度の観点が目標値 57.6 に対して 53.8、科学的な思考・表現が目標値 58.9 に対して 53.6 と低い値になっている。学習全体に対して苦手意識があり、授業の中で科学的な事象に興味・関心を抱くまでに時間がかかることが原因であると考えられる。

**8年** 基礎学力が十分身に付いていないため、「基礎」「活用」共にできていないと考えられる。特に、自然事象への関心・意欲・態度の観点が目標値 49.8 に対して 44.7 と低い値になっており、この観点到課題がある。理科に対する苦手意識や既習事項を活用して推論する力が十分身に付いていないことが原因だと考えられる。

**9年** 「基礎」「活用」共にできていないのは、基礎学力が十分身に付いていないためと思われる。特に、粒子と地球の領域に課題が見られた。観点別では、自然現象への関心・意欲・態度の正答率が低いことが、学習意欲につながらないと思われる。

### (3) 課題解決のための方策（取組指標）

7 年は、主体的な活動を身近な科学的事象に置き換え行うことで、授業の中で生徒の関心を引出し、身近な科学的事象について考察する機会を増やしていく。また、学習プリント等を用いて基本的な用語や計算などをスモールステップで生徒たちに取り組みせ、達成感を与えられるようにしていく。

8 年は、授業で、実験観察を多く取り入れ、結果から考察する機会を増やしている。教科書通りに結果が出ない場合も必ず原因があること、理科の技術は生活と関連があることなどを示し興味をもたせ指導していく。また、夏季集中講座や放課後の課題に区学力定着度調査用の復習課題を使用する。

9 年は、昨年度から実験観察を多く取り入れるとともに、身近な現象や生活関連のエピソードを紹介している。その結果、ほとんどの生徒が授業に意欲的に取り組むようになってきている。今後は、既習事項の反復学習を多く取り入れることによって、基礎学力の定着を図っていく。

### (4) 次年度の数値目標（成果指標）

7 年と 8 年共に、「基礎」では、目標値を上回ることを目指して基礎学力の定着を図る。また、「活用」では、目標値の 90% 以上を目指して既習事項を活用する力を伸ばしていく。

## 【 英 語 】

### (1) 英語の定着状況の概要

#### 《昨年度》

- 8年** 「基礎」の目標値 65.2 に対する正答率は 74.6、「活用」の目標値 50.5 に対し正答率は 60.5 であった。「基礎」も「活用」も目標値を大幅に上回っており定着できている様子である。

#### 《今年度》

- 8年** 「基礎」の目標値 58.0 に対する正答率は 66.9、「活用」の目標値 49.0 に対し正答率は 60.2 であった。「基礎」も「活用」も目標値を大幅に上回っており、定着できている様子である。

- 9年** 「基礎」の目標値 65.6 に対する正答率は 76.7、「活用」の目標値 47.0 に対し正答率は 59.0 であった。「基礎」も「活用」も目標値を大幅に上回っており、定着できている様子である。

今年度、どの学年も昨年度から引き続き「基礎」「活用」共に目標値を大きく上回り、大変高い定着率を維持できている。

### (2) 具体的な課題とその原因

- 8年** 「場面に応じて書く英作文」の「(how を使って手段をたずねる) 質問文を書く」問題で、目標値 30.0 に対し、正答率 35.9 であった。また、同内容の「(what と現在進行形を使って、していることをたずねる) 質問文を書く」問題で、目標値 30.0 に対し、正答率 36.4 であった。ただし、正答率は目標値を上回っているものの、状況を判断してふさわしい疑問文を考える力がまだ十分身に付いていないと考えられる。これは、本校のみに限ったことではなく、全体的に「書くこと」に対する苦手意識が払拭しきれていないことが原因であると考えられる。

- 9年** 「様々な英文の読み取り」の「英文と資料の情報・条件をもとに、相手の要望に対して適切に応じる」問題で、目標値 40.0 に対し、正答率 40.7 であった。また、同内容の「対話の流れと地図から、登場人物の適切な発言を判断する」問題で、目標値 50.0 に対し、正答率 50.0 であった。以上のことから、単なる英文読解問題ではなく、英文と資料の両方を扱った問題に対して課題が見られる。その原因として、情報処理能力と英文から細かい情報を読み取る能力が不十分であることが考えられる。

### (3) 課題解決のための方策（取組指標）

8年は、定期的に行っているスペリングコンテストを継続し、語彙力の定着を図るとともに、新出文法事項に合わせて英文を書く演習問題に取り組み、「書くこと」への抵抗感を減らすようにする。また、区学力定着度調査用の復習課題を補習課題として活用していく。

9年は、まず読解能力の向上を目指し、多くの長文読解の問題に取り組みさせる。また、その際に概要把握だけでなく、細かい部分の内容理解にも目を向かせる。そして、グラフや図を用いた問題にも取り組み、情報を読み取る能力の向上を図る。

### (4) 次年度の数値目標（成果指標）

8年は「書くこと」の力を高めるとともに、全領域において目標値を上回る正答率を目指す。